



日本地球化学会ニュース

No. 204 March 2011

Contents

東北地方太平洋沖地震により罹災された皆様へのお見舞い.....	2
年会のお知らせ.....	2
2011年度日本地球化学会年会のお知らせ(1)	
学会からのお知らせ.....	2
『地球化学』誌掲載の博士論文抄録の募集	
@geochem.jp アカウントの個人利用のご案内	
研究集会の報告とお知らせ.....	3
日本地球惑星科学連合2011年大会のお知らせ	
Goldschmidt 国際会議2011のお知らせ	
2009年度第2回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-66)	
2010年度第2回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-68)	
院生による研究室紹介 No. 19	6
首都大学東京大学院理工学研究科分子物質化学専攻 宇宙化学研究室	
(海老原充教授)	
訃報	
増田彰正 名誉会員	

東北地方太平洋沖地震により 罹災された皆様へのお見舞い

このたび、未曾有の震災にあわれた会員の皆様、そしてご家族の皆様には、心より深くお見舞い申し上げます。幾多の尊い生命が奪われ、愛すべき街が消失し、長年にわたって築きあげたものが瓦解してしまいました。

皆様におかれましては、一刻も早く危機的な状況から逃れられますことを、また、大きな余震が予想されますので、引き続き、安全が確保されますことを切に望んでおります。

日本地球化学会
会長 海老原 充

年会のお知らせ

2011年度日本地球化学会年会のお知らせ(1)

主催：日本地球化学会

会期：平成23年9月14日(水)～16日(金)

会場：北海道大学学術交流会館（札幌市北区北8条西5丁目）と大学院地球環境科学研究院（北10条西5丁目）。

JR 札幌駅北口・西口より徒歩5分。

アクセスについては、下記のサイトを参照下さい。

http://www.hokudai.ac.jp/footer/ft_access.html（駅からの経路）

<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/map/guide-map.pdf>（キャンパス内地図）

内容：口頭発表及びポスター発表（昨年と同様に、全ての発表を30程度のセッションの中で行います）、学会賞記念講演、総会、懇親会。

セッション提案：会員からのセッション提案を歓迎します。4月15日(金)までに事務局（gsj2011-loc@geos.ees.hokudai.ac.jp）にご連絡ください。

締切：講演申込及び要旨提出（昨年と同様に、同時に行ってください）：7月15日(金)予定。事前参加登録：8月26日(金)（割引料金適用）予定。各種申込は学会のホームページ上から行いますが、その詳細については次号のニュース、あるいは学会のホームページをご覧ください。なおホームページからの申込が困難な方は年会事務局にそれぞれ締切の1週間前までにご連絡下さい。

年会のホームページ（<http://www.wdc-jp.biz/geochem/2011/>）は4月上旬に開設します。

関連イベント：市民講演会、ショートコース（詳細は次号のニュースでお知らせします）

小集会：学会期間中の昼食時間、あるいは講演終了後に小集会を行うことができます。希望のあるグループは年会事務局にお問い合わせください。

年会事務局：

〒060-0810 札幌市北区北10条西5丁目

北海道大学大学院地球環境科学研究院内

2011年度日本地球化学会年会事務局

E-mail: gsj2011-loc@geos.ees.hokudai.ac.jp

学会からのお知らせ

●『地球化学』誌掲載の博士論文抄録の募集

『地球化学』誌には、日本地球化学会会員（近日入会予定者を含む）が過去3年間に提出した博士論文の抄録を掲載しています。特に締め切りは設けていませんが、学年暦の切れ目であるこの時期にぜひ投稿をお願いいたします。特に、今年学位を取得されて4月から新しい生活が始まる会員の皆様には、忘れずに投稿をお願い致します。『地球化学』誌の博士論文抄録を通じて博士論文の内容を広くアピールすることは、地球化学会にどのような若手研究者がいるかを地球化学会の内外に知って頂くためにも重要だと考えています。また、一般会員の皆様には該当する周囲の会員に投稿を勧めて頂けるようよろしくお願い致します。

投稿方法は次の通りです。

氏名（和文・英文）、博士論文の題目（和文・英文）、博士論文提出先（和文）、博士論文の提出年、現在の所属（和文・英文）と連絡先（電話とメールアドレス）、博士論文の内容（和文）をまとめ、電子メールの添付ファイルで下記の原稿送付先まで送付する。メールの表題は、「地球化学投稿」とする。

刷り上がり2ページに収まるように、論文の内容は題目・提出先・氏名を除いて4,000字以内を厳守する。図または表を掲載する場合には、本文と別のページあるいは別のファイルとして、同様に送付する。図・表は1枚につき500字として数える。本文・図表とも作成ソフト名とファイルの保存形式をメール本文に明記する。

原稿送付先は以下のとおりです。

『地球化学』編集委員長

高橋嘉夫

E-mail:chika@geochem.jp

(電子媒体以外を用いた郵送の場合は下記に送って下さい)

〒739-8526 広島県東広島市鏡山1-3-1

広島大学大学院理学研究科

地球惑星システム学専攻 高橋嘉夫

●@geochem.jp アカウントの個人利用のご案内

3月は異動の多い季節です。所属異動によりこれまで利用されていたメールアドレスが使えなくなることはよくあると思います。ポストクや博士課程の学生などの若手研究者が公募書類に連絡先として載せていたメールアドレスが、公募審査中の異動により使えなくなってしまうようなことも考えられます。また、急な異動に前後して提出した論文の審査結果が届かなくなるようなことも考えられます。

このような事態を想定して、特に若手や停年退職前後の方々を対象として日本地球化学会では@geochem.jpのメールアドレスを利用することで、連絡先を確保できないかと考えています。

現在この転送アカウントは学会幹事などへの連絡用に使用されています。@geochem.jpへのメールはそれぞれの幹事の個人のアドレスに転送されるように設定されています。この転送アドレスを学会員個人で利用できるようにしたいと考えています。異動などが想定される場合にあらかじめ@geochem.jpに転送用アカウントを作成し、書類などに連絡先としてこのアドレスを書いてくだされば、転送先を変更するだけで途切れることなくメールが届くようになります。なお、このアカウントは来たメールを転送するだけです。メールの内容が学会のサーバーに残ることはありません。

使用してみたいと思われる方は、会員幹事 member@geochem.jpまでご連絡ください。@geochem.jpの前に何を置くのか、転送先のアドレスを何にするのか(新旧のメールなど複数可能)を連絡いただければ、転送アカウントを作成いたします。

なお、使用できるアカウント数に限りがあります(60件程度)。使用する理由がなくなった場合には、その旨を連絡いただければ、転送を中止し、アカウン

トを消去いたします。また、年度毎に継続利用されるかどうかの確認を行います。

本件に関わりましてご質問等ございましたら、会員幹事までご連絡ください。

(会員幹事 丸岡照幸)

研究集会の報告とお知らせ

●日本地球惑星科学連合会2011年大会のお知らせ

日本地球惑星科学連合大会は、地球・惑星・宇宙科学に関連する48の学術協会が共同で開催する学会で、今年度は約3,700件の要旨が投稿されました。この様に多様な研究者が一同に集う機会は、連合大会において他にないと思われま。皆様、奮ってご参加下さい。

会期：2011年5月22日(日)～27日(金) 6日間

会場：幕張メッセ国際会議場(千葉市美浜区)

詳細は大会ホームページ <http://www.jpogu.org/meeting/index.htm> をご覧下さい。

主な日程

2011/5/9大会参加登録申込早期締切

日本地球化学会が提案母体となっているセッション
水循環、大気化学、固体地球化学・惑星化学、火山の熱水系(セッション記号順)

(広報幹事 下田 玄)

●Goldschmidt 国際会議2011のお知らせ

Goldschmidt 国際会議は、8月14日から19日にチェコ共和国の首都プラハで開催されます。この国際会議は、地球化学に関連する多くの分野を網羅しており、最新の成果について活発な議論がなされます。また、セレモニーでは、Geochemical Journal 賞の授与式も行われます。詳細はGoldschmidt 会議のホームページを(<http://www.goldschmidt2011.org/>)を参照下さい。現在、要旨の投稿を受け付け中です。主な日程を以下に示します。

〈今後の日程〉

2011/2/15、要旨投稿受付、オンライン参加登録開始

4/15、要旨投稿終了(23:59 UTC)

6/15、早期参加登録終了

7/15、オンライン参加登録終了

8/14~19, Goldschmidt 2011開催 (チェコ共和国 プラハ)

(広報幹事 下田 玄)

●2009年度第2回「鳥居基金」助成実施報告(TE-66)

氏名(所属): 光延 聖(静岡県立大学・環境科学研究所)

助成: 海外渡航(アメリカ)

課題: 国際会議 Goldschmidt 2010における研究発表

Goldschmidt 2010は、2010年6月13日から6月18日まで、アメリカ・テネシー州の工業都市ノックスビルにて開催された。会場のコンベンションセンターは、州東部のテネシー川の近くに位置し、風光明媚な景色に囲まれ、初夏の過ごしやすい気候の下、活発な議論が行なわれた。

本国際会議は、太陽系の起源から環境科学までの幅広いトピックスを対象とした地球化学に関する総合国際研究集会であり、1988年の第1回大会から北アメリカとヨーロッパを中心に開催されている。年々、参加者が増え、カバーする領域も広がっており、現在、地球化学に関する最大、最高水準の国際会議となっている。

会議の名称である V. M. Goldschmidt は地球化学の創始者であるが、鉱物学者・岩石学者としても知られており、本会議の対象もまた、地球化学を中心に岩石学・鉱物学・環境化学、大気科学など多岐にわたっている。最近では、水圏環境化学や生物地球化学についても発表も増えており、最先端の研究動向を知るためにも、本会議への参加は筆者にとって意義深いものであった。

今回の会議では、各国より2,000名を超える参加があり、発表件数は口頭発表、ポスター発表合わせて約2,500件であり、これに加えて特別セッションとして招待講演が行なわれた。会議の各セッションは、22テーマに分かれて行なわれた(1. Planetary evolution and astrobiology, 2. Evolution of the early earth, 3. Deep-Earth processes: core and mantle, 4. Physics and chemistry of earth materials, 5. Evolution of oceanic crust and its hydrothermal systems, 6. Amalgamated into theme 8, 7. Fluids, magmas and hydrothermal ore formation, 8. Metamorphism over multiple length and time scales, 9. Geochemistry of energy systems, 10. Global element cycles and cli-

mate change, 11. Oceans and atmospheres, 12. Reconstruction of paleoclimate, 13. Hydrogeochemistry of surface earth processes, 14. Weathering interactions in critical zone processes, 15. Mineral-Microbe interactions, 16. Frontiers in biogeochemistry, 17. Nano-Geo and -Environmental Science: a new frontier, 18. Atomistic and molecular modeling of geochemical processes, 19. Application of X-ray and neutron methods to geochemistry, 20. Analytical and experimental techniques, 21. Further geochemistry sessions, 22. General geochemistry)。このうち、セッション15~18などは筆者の専門分野である鉱物-水が関わる地球化学の分野に関連しており、本会議における主要トピックのひとつであった。いくつかのテーマタイトルにみられるように、生物地球化学に関連したテーマに高い関心が集まっていた。微生物や微生物が生成した生体鉱物の表面に存在する配位子が微量元素の環境挙動に及ぼす影響や、鉱物や微生物自体の酸化還元反応における触媒作用などについて、室内実験や分光学的手法を併用し、分子地球化学的なアプローチにより詳細なメカニズム解明がなされていた。筆者も使用している放射光源 X 線分光法の先進的応用例も多数報告されていた。例えば、P. S. Nico (Lawrence Berkeley National Laboratory, USA) らによってなされた、バイオミネラル中の炭素・窒素の化学状態をシングルセルレベルで STXM (Scanning Transmission X-ray Microscopy) によって明らかにした報告が興味深かった。この手法は、集光した X 線を使い、数十 nm の高い空間分解能で走査することで吸収コントラストを得る顕微的手法であり、近



コンベンションセンターの展望台で会議参加者と
(左から2人目が筆者)

年、注目されている手法である。この手法は主に炭素、窒素、酸素等の軽元素に有効であり、分子レベルで微生物の触媒作用を解明することが可能となり、今後、生物地球化学分野で広く応用されていくものと考えられる。

筆者らは会議最終日である6月18日に、地球表層に存在する水酸化鉄鉱物への微量金属の取り込みメカニズムに関する口頭発表（題目：Direct determination of Sb (V) incorporation into synthetic and natural Fe hydroxides by EXAFS）を行った。講演後や会期中に様々な意見をいただき、大変有意義な議論を行なうことができた。

筆者の研究分野である常温での水一鉱物が関わる地球化学は、Low-Temperature geochemistry と呼ばれ、世界的にも多くの研究者が幅広い分野で研究を進めている。しかしながら、この分野の中心は依然として欧米の研究グループであり、今後日本の Low-Temperature geochemist が世界に対して存在感を示すには、欧米の研究に追随するだけでなく、日本独自の研究テーマやオリジナルなアプローチ法を構築していく段階にきていると感じた。このような点からも、今回の会議参加は自身の研究の方向性を俯瞰するのに大変よい機会となった。

なお、Goldschmidt 2011はチェコのプラハで開催される予定であるが (<http://www.goldschmidt2011.org/>)、幅広い分野を含んだ国際会議という特色がさらに発展することを期待している。

本会議には、日本地球化学会による「鳥居基金海外渡航助成」の援助を受けて参加および発表することができました。関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

●2010年度第2回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-68)
氏名 (所属)：角野浩史 (東京大学大学院理学系研究科・地殻化学実験施設)
助成：国内研究集会
課題：火山性流体討論会

火山性流体討論会は、火山性流体 (火山ガス・熱水・マグマ・超臨界流体・地下水・地殻流体等) の地球化学的観測、モデリング等の話題を中心として、時間をかけた討論をするために、毎年開催しています。討論を主体とすることで、若手と中堅研究者の距離を縮めるとともに、特に学生に広い視野を持つことの重

要さや研究への魅力を感じてもらい、将来の地球化学を担う研究者を育成することを目的としています。

討論会は、2010年11月26日(金)～28日(日)の日程で、茨城県常総市のあすなろの里を会場として、合宿形式で開催しました。例年の討論会は入梅のころでしたので、この時期の開催は初めてで寒さが心配でしたが、特に問題もなく進行できました。25名の参加者の内訳は、院生11名、ポスドク4名、若手常勤職5名、中堅以上5名となり、学生や若手主体の討論会となりました。学生が45分、社会人が30分の持ち時間で討論を行いました。学会発表とは違って、発表の途中でも質問できるような方式を採用しましたので、討論が盛り上がり持ち時間をオーバーするケースが続出してしまい、2晩とも深夜まで及ぶ討論となりました。

討論会の終了後に学生の参加者にアンケートをお願いして、討論会や地球化学会の印象や意見をお伺いしました。発表や討論時間、参加費について多くの参加者が満足しているようでした。ビジネスミーティングの時間の一部を使って、討論会の開催にあたって地球



集合写真



レクリエーション (バーベキュー) でのひとコマ

化学会から鳥居基金の援助を受けたことや、地球化学会の活動などについて紹介を行いました。学会に対する印象として、面白そう、自分の研究分野と一致するとの回答が最も多く、興味がないとの回答はゼロで、入会を検討したいとの回答を寄せてくれた方も何名かいました。また、会費・交通費の補助があったおかげで、討論会に参加することができて感謝しているとの、遠方より参加した方の意見もありました。

討論会では、レクリエーションとしてサッカーやテニスをしたり、バーベキューや消灯前の懇親会を行ったりしました。こういった課外活動的なプログラムによって、参加者の親睦が深まったことは確かで、これまでの討論会で知り合った参加者同士が、次の他の学会などで再会したときに、すぐにうち解け合う光景を何度か目にしています。学生からのアンケートでも「学会とは違って、交流が深くなるので、より突っ込んだ議論ができる」との意見が寄せられています。

討論会の会場として、安価かつ深夜まで使用可能であるとの条件が欠かせず、ここ数年は限られた会場での開催が続いてきましたが、来年度の討論会は東北大学の方々のお世話で、東北地方での開催を予定しています。本討論会は学生参加者について、遠方からの方も近隣からの方も同程度の経済的負担で参加できるようにとの考えを持って運営に当たってきたことから、今後も学生への旅費の援助が欠かせないと感じております。そのような中で、鳥居基金に代表される研究集会への助成制度の存在意義は大変大きく、今年もその援助のおかげをもちまして、火山性流体討論会を成功

裏に終えることができましたことに、厚く御礼申し上げます。



院生による研究室紹介 No. 19

首都大学東京大学院理工学研究科分子物質化学専攻
宇宙化学研究室

(海老原充教授)

第19回となります、「院生による研究室紹介」、今回は首都大学東京大学院理工学研究科分子物質化学専攻宇宙化学研究室（海老原研究室）の紹介をさせていただきます。

海老原研究室は現在、海老原充教授、大浦泰嗣準教授、白井直樹助教の3名のスタッフと、大学院生9名（博士過程2名、修士課程7名）、学部生4名の計16名で構成されています。（といってもすぐ4月には入れ替わりがあるのですが……）(写真1)

海老原研究室の特徴の一つとして、「化学科」に所属する研究室である、ということが挙げられると思います。これは、海老原研究室が宇宙・地球化学の研究室であると同時に、放射化分析を主体とした分析化学系の研究室である、という面も強く持っていることを反映しています。そのため、学生の中にも、宇宙について興味があるものから、放射化学や分析化学に興味



写真1：研究室メンバー集合写真（前列中央が海老原教授、左に大浦準教授、右に白井助教。筆者は前列右から二番目）

があるものといった様々な興味を持った人間が在籍しています。

また、放射化学関係の繋がりからは、マレーシアやバングラデシュ、フィリピンといった主にアジアの国々からの留学生の受け入れも行っており、現在もバングラデシュからの留学生1名が博士課程に在籍しています。

研究室の特徴としてもうひとつ、放射化分析が可能である、という点も大きな特徴といえると思います。というのも、放射化された物質を扱うことはそれ専用の設備と人材が必要とされ、どこでも、誰でもが行うことができるものではないからです。首都大学東京には放射化された物質を扱う専用の実験棟、RI棟がおかれており、その中には海老原研究室所有のGe半導体検出器もおかれています(写真2)。このRI棟と、放射線検出器があることにより、研究室での種々の放射化分析法が可能となっています。放射化分析は岩石や隕石などの宇宙・地球化学的試料の全岩元素組成を測定することにも非常に適した分析法であるため、研究室で用いる分析法の中でも重要な位置を占めています。

海老原研究室では主に上記の放射化分析法を用いた岩石・隕石試料の全岩化学分析を行っているのです



写真2：Ge半導体検出器（いくつかあるうちの一つ）

が、海老原先生付きと大浦先生付きで、学生の研究テーマを大きく二つに分けることができます。海老原先生側では、特に希土類元素(REE)、白金族元素(PGE)、(宇宙化学的)揮発性元素(Zn, Cd, In, Tl, Pb, Bi)といった微量元素群に注目し、隕石やその母天体の形成や進化について明らかにしていこうとしています。

例えば希土類元素では、親石性元素であることと、元素同士の化学的特徴が極めて似ていながら鉱物相中への分配挙動が系統的に異なる、という特徴があります。それらの特徴から、希土類元素存在度はケイ酸塩を主成分とした岩石・隕石の形成過程を知る手がかりとして有用です。また、白金族元素は親鉄性の極めて強い元素群であり、地球のようなコア・マントル間の分化を起こした天体表層(ケイ酸塩層)にはほとんど存在しません。反対に、地球上で見つかる隕石の多くを占める、コンドライトと呼ばれる未分化の物質、あるいはほぼ全量がFe-Niの金属からなる鉄隕石中には分化した天体の表層試料の実に数千倍以上の濃度で存在しています。この大きな存在度の差から、白金族元素は地球や月、分化した小惑星表層での天体衝突イベントがどのようなものであったか、という手がかりを得るための良い指標となります。さらに揮発性元素では、特に太陽系初期の星雲ガスの凝縮やその後の熱変成といった現象と元素組成との関連の解明を期待し、分析法の開発を行ってきました。昨年開発が一段落し、これから実試料への適用が期待されています。

大浦先生側では、 ^{36}Cl 、 ^{41}Ca といった宇宙線生成核種と呼ばれる核種に注目した研究を主に行っていて、対象の性質上、やや放射化学的な面が強くなっています。これら ^{36}Cl 、 ^{41}Ca といった宇宙線生成核種は文字通り宇宙線と隕石物質との相互作用である核反応により生成するものであり、その量から隕石の宇宙空間や地球上での滞在時間、大気圏突入前の隕石の大きさ、などを推定することができます。これらの情報は、隕石のペアリングを考える場合に特に重要になってきます。

これらの元素・元素群や核種を定量するための分析手法として、上に挙げた放射化分析法に加えて、誘導結合プラズマ質量分析法(ICP-MS)・発行分光分析法(ICP-AES)(写真3, 4)、加速器質量分析法(AMS)などを用いて実験を行っています。放射化分析では日本原子力研究開発機構(JAEA)や京都大学、東北大学といった研究機関の原子炉や加速器、加



写真 3：誘導結合プラズマ質量分析計
満身創痍ですががんばってくれています。

速器質量分析では筑波大学の加速器といった大型の実験設備を利用させていただいています（お泊まり実験なんかもありますよ）。

また、最近ではなんと、京都大学原子炉実験所の関本俊助教と共同で「はやぶさ」回収試料の初期分析も担当しており、その中でも最大級の大きさの試料の放射化分析を行ったりもしているそうです（なぜ伝聞かという、私たち学生は直接「はやぶさ」の実験には関わっていないからです。残念……）。

ところで、隕石の研究をするためにはどこかで隕石を入手してこなければなりません。とは言っても自然に落ちてくるのを待っていても望み薄な上、主な隕石の回収場所は砂漠や南極などの厳しい環境下のものがほとんどであり、探しに行くのは大変です。そんな貴重な隕石試料を提供してくださっているのが国立極地研究所の山口亮助教です（拍手！）。山口助教には共同研究という形での試料の配分をさせていただいており、また、鉱物学・岩石学といった学問に明るくない私たちに貴重な助言をさせていただいたりもしています。また、鉱物観察などの実験を行う場合には、極地研の設備をお借りさせていただいています。



写真 4：誘導結合プラズマ原子発光分光分析計
研究室の機器では新顔。これからの活躍に期待です。

このように大型の実験設備の利用や試料の入手の面から、複数の研究室・研究機関との関わりがあることも海老原研究室の一つの特徴ではないでしょうか。

研究室では週に一回セミナーが開かれており、学生が文献の紹介や研究の進捗の報告を行っています。宇宙化学の分野も対象、実験方法が多岐に渡ることから、それぞれの学生のテーマについても様々なものがあり、良い勉強になっています。その他にも今年度は海外の研究者を呼んで研究紹介をしていただいて、こちらも各自の研究を英語で紹介したり、通常のセミナーでの発表を英語で行うなどといった取り組みも行われました。

最後になりましたが、当研究室に興味を持たれた方、特に大学院進学を考える際に、宇宙へのロマンはあるけど理系科目は化学以外は少し苦手だ、というような方（あんまりいない？）がいましたらぜひ当研究室に足を運んでみてください。お待ちしております。

（首都大学東京大学院理工学研究科
分子物質化学専攻 宇宙化学研究室
博士後期課程 1年 日高義浩）

訃報：増田彰正 名誉会員のご逝去を悼む



本学会名誉会員の増田彰正先生が、平成23年3月17日に急逝されました。享年79歳でした。増田先生は、昭和6年に青森県にお生まれになり、東京大学理学部を卒業後、名古屋大学大学院を経て、東京大学理学部助手、同原子核研究所助手、米国NASA 研究員、東京理科大学理学部助教授、神戸大学理学部教授、東京大学理学部教授、電気通信大学電気通信学部教授を歴任し、教育と研究者の育成に尽力されました。

本学会においては、増田先生は会長・副会長を務められ、日本の地球化学の育成に大きな功績を残されました。なかでも *Geochemical Journal* の Chief Editor を長年務められ、地球化学を代表する国際誌の一つとして同誌を大きく成長させたことは特筆に値します。

増田先生は地球化学・宇宙化学の分野において、極めて独創性が高い先駆的な業績をあげた世界を代表する地球化学者です。ことに、世界に先駆けて微

量なランタノイド元素に着目し、地球化学・宇宙化学の多くの論文において利用されている、いわゆる希土類元素パターンを世界で最初に提案するなど、この分野における研究の基礎を築くとともに、関連諸分野に大きな衝撃を与えました。これらの御業績により、昭和58年に仁科記念賞、平成13年に日本地球化学会柴田賞を受賞されました。また、*Geochemical Society* から F. Earl Ingerson Lecture-ship を1997年に贈られました。

また、学術会議の地球化学・宇宙化学研究連絡委員会の委員長及び地質学研究連絡委員会委員、学術審議会専門委員、科学技術会議専門委員、国立極地研究所南極限石研究委員会の委員などの要職を務められ、わが国の学術、ことに理学の分野で大きな貢献をされました。さらに IAGC の評議員等を歴任し地球化学・宇宙化学の国際的な発展にも多大な貢献をされました。

増田先生の本学会への大きな貢献に感謝申し上げますとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(東京大学大学院理学系研究科附属地殻化学
実験施設 教授 鍵 裕之)

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会，書評，研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上，電子メールでの原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2011年6月頃を予定しています。ニュース原稿は4月下旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会ニュース・HP 幹事）

谷本浩志

〒305-8506 茨城県つくば市小野川16-2
国立環境研究所
大気圏環境研究領域

Tel：029-850-2930／Fax：029-850-2579

E-mail：news-hp@geochem.jp

鈴木勝彦

〒237-0061 横須賀市夏島町2-15
海洋研究開発機構（JAMSTEC）
地球内部ダイナミクス領域研究（IFREE）

Tel：046-867-9617／Fax：046-867-9315

E-mail：news-hp@geochem.jp